

最優秀賞

「大好きなじいじ」

鶴丸小学校 4年 鮫島 陽香

わたしのじいじは、面白くてがんこだ。じいじとわたしは、にた者どうしでけんかもよくする。

じいじは、屋根に登ってしゅう理をしたり、旅行にもいっぱい行ったりしていた。わたしの事も2年生まで、かた車をするぐらい、強くて男らしかった。でも、わたしが3年生の時にじいじは、病気になった。それからのじいじは、歩く時も足があまり上がらなくて物に引っかかるようになった。そして、すぐつかれるようになって、買い物にもあまり行かなくなった。

わたしが赤ちゃんの時は、お風呂に入れてくれていたと聞いたけれど、今は9か月の弟をお風呂どころか、だっこをするのでさえふ安そうだ。はりに糸を通す時みたいに、手がふるえている。そんなじいじを見ると、むねがチクチクする。

もし、じいじが1人で買い物に行ったら、聞きたい事があってもがんこだから、お店の人に、聞けないんじゃないかなと思った。わたしは、じいじが幸せに生活できるようにどんな事ができるかを考えてみた。

例えば、じいじは、野菜を育てるので、ひ料を買いに行った時、天井のかん板がぶら下がっているだけでなく、コーナーごとに何が売っているか、どこに何があるかなどのくわしい案内板があるといいなと思った。

他にも、体のふ自由な人でも商品を取りやすいように、1つ取った時に、商品がたなから落ちてこないようにしたり、レジで急ぐ人用のレジを作ったら、急げない人はあわてなくてすんで、みんなが気持ち良くすごせるなと思った。

わたしが、できる事も考えてみた。荷物を持ってあげたり、じいじと歩くスピードを合わせたりすると、じいじも楽しく出かけられると思う。

じいじだけでなく、みんなもいつか年をとって体が思うように動かなくなる事を考えて、そのことを当たり前と思えるようになれば、

子どもも大人も、おじいちゃん、おばあちゃんもみんなが楽しい、幸せな暮らしができると思う。

そして、一番大切なのは、助けをもらう事が特別な事ではなく、まわりの人たちがこまっている人に声をかける事が当たり前になってほしい。そしたら、がんこなじいじも、すなおに助けをもとめられるなどと思う。

わたしの大好きなじいじが、また自分で買い物をしたり、楽しくお出かけをしたりできるようになってほしいな。それと、じいじだけではなく他の人も楽しく生活できるといいなど思う。

これからもっと、じいじは体が動かしくくなるのかもしれないけれど、どんなじいじでも、わたしは、じいじといっぱい外に出かけたり、遊んだり、けんかもしたりしたい。

そのためにも、わたしはじいじの立場に立っていやがる事かうれしい事かを考えて、うれしくなる声かけや行動をしていきたい。

